

【広島】アマノ病院が新築移転「コミュニティホスピタルを目指す」-天野純子・医療法人ハートフル理事長に聞く◆Vol.1

リハビリ医療に強み、外科治療を行う脊椎センターも

2025年10月22日 (水)配信 m3.com地域版

2025年9月1日、リハビリ医療を強みとするアマノリハビリテーション病院が新築移転し、「アマノ病院」として廿日市市串戸に開院した。外科治療からリハビリまで切れ目なく行おうと脊椎センターを開設し、脊椎外科医などが新たに加入。時代に合った地域密着型を推進するため、「コミュニティホスピタル」を目指していく方針だ。運営する医療法人ハートフルの天野純子理事長に、新病院のコンセプトや機能を聞いた。（2025年9月9日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら



天野純子氏（病院ホームページから引用）

人的コストを抑え、運営効率化を目指す

——2025年9月1日、廿日市市陽光台にあったアマノリハビリテーション病院が同市串戸に新築移転し、「アマノ病院」として開院しました。構想はいつ頃、どんな経緯で生まれたのでしょうか。

時代の変化に伴い、より効率的な法人運営を目指そうと2020年ごろから検討を始めました。広島市に隣接する廿日市市は全国の傾向と同様に少子化と人口減少が進んでおり、若いスタッフの雇用が難しくなっています。さらに材料費の高騰にも直面していたため、まずは人的コストの抑制が必要だと判断しました。当法人は2000年から串戸で「あまのクリニック」を運営しているため、病院を隣に移転すれば施設を横断してスタッフが働くようになります。実際、移転することでクリニックに勤務する医師を削減できました。加えて、「当院の強みを生かした機能の拡充」と「時代を見据えた新たな病院像の構築」も移転の背景に挙げられます。

J A広島総合病院の元院長・藤本氏が脊椎センター長に

——報道によると、8月21日に行われた竣工式で廿日市市の松本太郎市長が「市に今までなかつた医療機能なので非常に期待している」と話したといいます。これは、新設された脊椎センターのことでしょうか。

そうです。アマノ病院は6階建てで120床（回復期リハビリテーション病床88床、地域包括ケア病床32床）を有し、手術室3室の脊椎センター、リハビリセンター、コミュニティセンターを備えます。外来では内科、リハビリテーション科、泌尿器科、脊椎外科、整形外科、循環器科を標ぼうしています。

脊椎センターは先ほど話した「当院の強みを生かした機能の拡充」を指します。当院はこれまでリハビリに注力しており、今後はより全国的な課題である「健康寿命の延伸」に地域の病院として貢献したいと思っていました。そんな中、ご縁があって急性期病院であるJA広島総合病院で院長を務められた藤本吉範（よしのり）先生と出会いました。藤本先生は脊椎外科医として活躍される一方、リハビリ医療への問題意識も強くお持ちでした。手術自体は成功しても、転院後の患者さんの機能回復が十分でない事例を見て、「外科とリハビリの連携が不可欠」と考えていたのです。そこで、「私たちがタッグを組むことで地域医療の質向上を図れるのではないか」とセンター開設の構想が立ち上がりました。

リハビリ病院としての基盤がある当院に藤本先生など脊椎外科の先生方に加入していただければ、一つの病院内で多職種がチームを組み、外科治療からリハビリまで切れ目なく行えるようになります。私たちからすれば患者さんと早くつながれるようになり、また、藤本先生はリハビリの過程を自らの目で確認できるようになります。

——脊椎センターなどの設置により、人的体制にも変化があつたのでしょうか。

脊椎センターに関わる医師が6人入職しました。内訳は、藤本先生を含めて脊椎外科医が3人、関節を専門とする整形外科医が1人、麻酔科医が1人、腎臓内科医が1人です。このほか、リハビリセンターやコミュニティセンターの体制を充実させるため、脳神経内科医と脳神経外科医も加わったので、総勢13人の常勤医体制となりました。法人全体の職員数は約520人で、このうちアマノ病院に勤める職員は270人です。病院に在籍するリハビリ職——理学療法士、作業療法士、言語聴覚士——は87人に上ります。

藤田医科大・大杉氏の講義に感銘「新しい地域密着病院へ」

——ホームページによると、同院は「コミュニティホスピタル」を目指しており、コミュニティセンターはそれを推進していくための部門だといいます。近年、コミュニティホスピタルを掲げる医療機関が全国で増えつつある印象を受けます。

先に挙げた「新たな病院像」として私たちが掲げているのが、コミュニティホスピタルです。コミュニティホスピタルの具体的なあり方は病院や病院が立地する地域の医療状況によって微妙に異なると思いますが、大枠としては単に病気を治すだけでなく、「地域住民の暮らしと健康を多面的に支える病院」を意味します。私は20代で病院を継いで以来、常に「地域に求められることは何か」を考えてきました。そんな中、知人の紹介でコミュニティホスピタルを提唱・実践する藤田医科大学総合診療科の大杉泰弘教授の講義を聞きました。

大杉先生はコミュニティホスピタルの一つのモデルをつくった穎田（かいた）病院（福岡県飯塚市）に勤めた後、「地元でコミュニティホスピタルをつくろう」と愛知県に戻って2015年に豊田地域医療センターに加入し、同年に藤田保健衛生大学（現藤田医科大学）の総合診療・家庭医療プログラム（現藤田医科大学総合診療プログラム）を立ち上げました。同センターはコミュニティホスピタルとして総合診療を軸に幅広く診療し、外来診療や入院医療だけでなく、リハビリと在宅医療までワンストップで提供しています。さらに、地域のハブとしてクリニックや高齢者施設、行政などと連携するほか、町づくりにも携わっています。

「これからは、地域と共にある病院をつくっていくことが大切です」——。講義の中で大杉先生の思いを聞いた私はとても感銘を受けました。当法人の祖となる「天野医院」は明治期に生まれ、以来、「地域のために・地域とともに」を理念に掲げてきました。「私たちが大切にしてきたこととコミュニティホスピタルの概念はマッチするのではないか」。そう思い、実現に向けてコミュニティセンターを開設した次第です。法人の理念も、今回の移転を機に「With コミュニティ！－地域とともに－」に変更しました。地域のニーズとともに、変化し続ける法人を目指したいです。

◆天野 純子（あまの・じゅんこ）氏

1987年東海大学医学部卒。広島大学病院第一外科、加計町国民健康保険病院外科（現安芸太田病院）を経て、1990年に曾祖父が開設した天野医院の外科に勤務。1997年医療法人フェニックス（現医療法人ハートフル）理事長に就任し、現在、アマノ病院リハビリテーション部門長を兼任する。日本リハビリテーション医学会専門医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

